

## 宇都宮市花の木町遺跡出土土器の再検討 －栃木県における古墳時代前期末の土器様相－

後藤 信祐

- 1.はじめに
- 2.栃木県の古墳時代前期土器研究の現状
- 3.花の木町遺跡の概要
- 4.花の木町段階の設定と県内の関連遺跡
- 5.近県における該期土器の様相
- 6.栃木県の該期土器様相
- 7.おわりに

### 1.はじめに

古墳時代前期の土器研究は、古墳の出現期を理解する上で欠かせない要素であり、多くのシンポジウムや論文が発表され、各地で編年案が示されている。しかし、出現期ということで前期でも古い時期のほうへ議論は偏りがちである。一方、中期の土器研究に関しては、近年古式須恵器との共伴からの編年案なども新たに示されているものの、本県では古い段階で須恵器は共伴せず、前期からの流れのなかで捉えなければならない。また、本県では前段階の土器様相があまり明確でないことから前期と中期の土器様相に大きなヒアタスを感じられる。

この時期をうめる土器群として、8年前に発掘調査した花の木町遺跡が良好な資料を提示した。これらの土器群は当時、大形壇・小形丸底壇・器台等の存在から、古墳時代前期の土器群と考えられていたものの、高杯に関しては県内ではあまり知られていない中実柱状脚の高杯や次期に盛行する脚部がラッパ状に開く柱状高杯が共伴することから、栃木県内ではやや異質の土器群と考えられがちで、共伴関係に疑問さえさやかれた。しかし、発掘調査の所見、各住居跡出土土器の器種組成から古墳時代前期末の一集落の同一時期の土器群としてとらえ報告書をまとめた（阿部 後藤 1987）。

その後、発掘調査の増加に伴い、この時期の資料も充実してきている。特に、東北地方南部では顕著であり、花の木町遺跡の土器群が関東地方の土器群と対比するうえで重要な資料となりうると考えられ、再度これらの土器群について検討してみた。

小稿ではまず、栃木県内のこれまでの古墳時代前期の土器研究の現状を把握する。次に花の木町遺跡の報告時の概要を述べ、花の木町段階の設定を行う。そしてこれらの土器群と関連す

る県内の遺跡を紹介し、近畿の該期の土器様相について概観した後、本県の花の木町段階とその前後の段階の土器様相について補足してみたい。

## 2. 栃木県の古墳時代前期土器研究の現状

本県ではじめて古墳時代前期の集落を発掘し、前期の一括遺物の土器群を認識したのは、1971年の真岡市井頭遺跡の発掘調査である(大企 1973)。その後、発掘調査、県史編纂に伴い資料が増加し、各遺跡の土器様相に相違が認められるようになり、1970年代後半から80年代前半には段階区分が可能になってくる。

まず、1979年の『宇都宮市史』第1巻で山ノ井沿人は、S字型に代表される東海地方の影響を受け、その様相を濃く残している段階(谷近台遺跡2号住)と全国的齊一性を示す段階(井頭遺跡5区37号住・沢田遺跡・程島A遺跡)の2期に区分を示した(山ノ井 1979)。

翌年、小森紀男は谷近台遺跡の位置付けを行ななかで、県内の古墳時代前期の土器をⅠ期—弥生末から古式土師器への移行期(谷近台遺跡・向北原遺跡13号住等)、Ⅱ期—小形丸底壺、器台を中心とするセットの形成、土器の齊一化(井頭遺跡・薬師寺南遺跡等)、Ⅲ期—和泉期直前の様相(向北原遺跡・初納遺跡・山王寺大橋塚古墳)の二期に区分している。本論で中心的に取り扱うⅢ期については、南関東地方の千葉県我孫子中学校校庭遺跡、東京都船出遺跡、埼玉県下加南遺跡を念頭に入れたものと考えられるが、本県では良好なセット関係が把握される遺跡はなかった(小森 1980)。

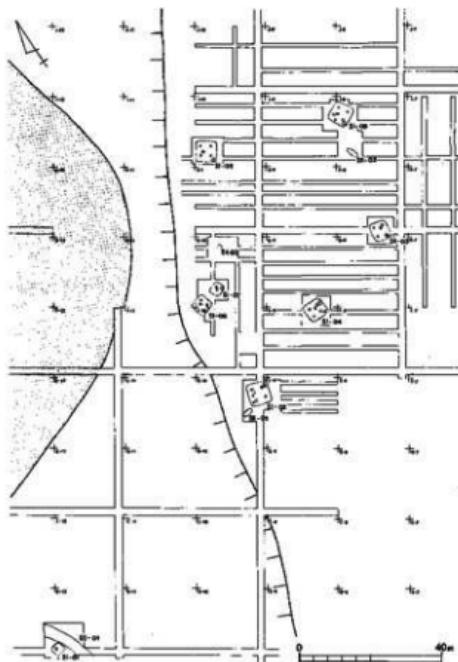
その後、橋本澄朗は1981年『栃木県史』通史編、同年宇都宮市で開催された日本考古学協会秋の大会『シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題』、1984年『古墳時代上器の研究』で三回の編年案を示している。県史では壺と高杯に注目し、Ⅲ期に区分し、Ⅰ期は谷近台遺跡2号住、井頭遺跡5区37号住を、Ⅱ期は薬師寺南遺跡、右闇遺跡を基準資料としている。しかし、石闇遺跡については高杯が当時、関東地方では類例がなく、異質なものであることから地域性や遺跡の特殊性を指摘するにとどめている(橋本 1981)。同年のシンポジウムでは橋本を中心とする県内の研究者により三期区分が示されている。Ⅲ期に当時新資料で口輪部に刻みを施し、南関東との関連をもつ壺が共伴する鳥森遺跡、赤井戸・古ヶ谷式と類似する土器を作出する伯仲遺跡を位置付け、Ⅳ期に県史でⅠ期とした谷近台遺跡・井頭遺跡をあげ、古式土師器の器種がほぼ出揃う段階とし、Ⅴ期を台付壺の減少傾向と、後半には器台が消滅するとし、薬師寺南遺跡・柴工業団地内遺跡を基準資料としている(橋本 1988)。1984年の『古墳時代上器の研究』ではシンポジウムの編年をほぼ踏襲しているが、谷近台遺跡を一段階古くし、鳥森遺跡・伯仲遺跡との土器様相の差を地域差として捉えている(橋本 1984)。その後、本県では1981年のシンポジウムの編年案が大方の支持を受けている。

ここでは、これまでの編年案に対し前期後半段階についてのみ問題点を指摘する。まず、段階比定については各段階で着目する基準が異なっており、各器種ごとの段階変遷に不明瞭な点<sup>(注1)</sup>がいくつかみられる。さらに、一住居跡の一括遺物の器種の欠落を補完関係で捉えるのか、出現前、消滅後と捉えるのか、さらには地城差と捉えるかによって細部において多少の齟齬が生じてくる。器種の多いこの時期に関しては、集落内でのある程度の補完関係を考える必要がある。また、石関遺跡が1977年に発掘調査が実施され、1979年に古墳時代前期の土器として報告されているにも係わらず、その後の編年で殆ど用いられることがなかった(鈴木 1979)。これは、県内では中尖柱状脚の高杯が初出で、土師器研究が南関東・東海・近畿地方に向いていたことによるもので、この地方に類例がなかったためと考えられる。東北地方南部にも注目していれば、本県の前期末の基準資料となりえたであろう。

その後、最近まで目立った編年案は示されていないが、赤羽根遺跡(岩淵 1984)・伯仲遺跡(藤田 1984)・烏森遺跡(田代 1986)の報告書において、各遺跡の出土土器の位置付けが詳細な分析により行われている。また平成2年と4年に当事業団と福島県文化財センターとの定期協議会において古墳時代前期の土器が集成され、古墳時代分科会のメンバーにより本県の三期編年案が示されているが、これが現在の県内における古墳時代前期編年の到達点と言えよう(財団法人栃木県文化振興事業団・財団法人福島県文化センター 1990)。

### 3. 花の木町遺跡の概要

花の木町遺跡は宇都宮市西川町字花の木に所在し、栃木県立子ども総合科学館の建設に伴い昭和59年度に栃木県教育委員会から委託を受け当事業団が実施した。時間的制約から十分な調査が出来なかつたが、古墳時代の堅穴住居跡

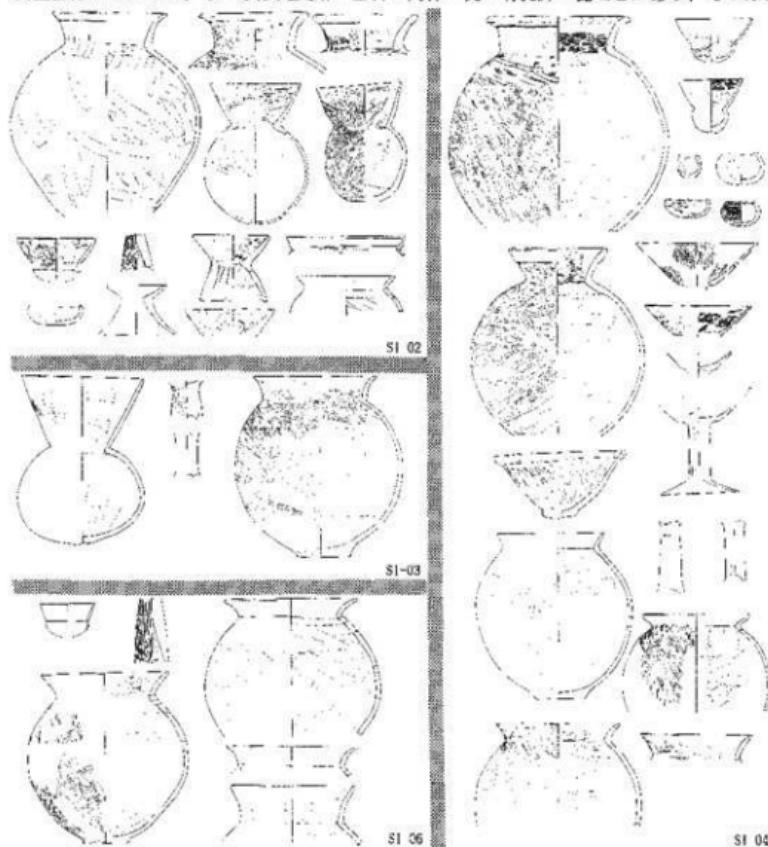


第1図 花の木町遺跡遺構配置図

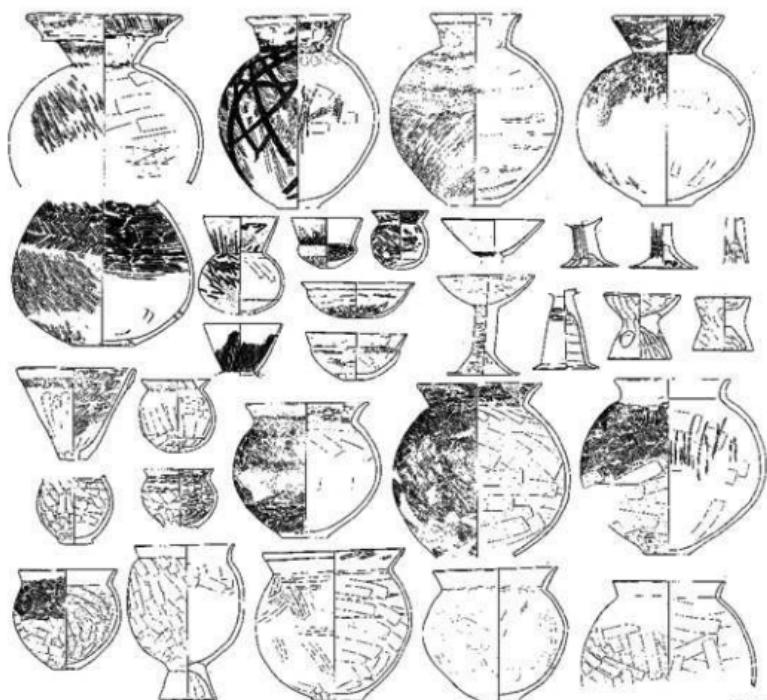
8軒、十坑3基、溝1条などを発見した(第1図)。

これらの遺構のうち、SI-01、SD-01周辺については未調査のため不明な点が多いが、その他の住居跡・土坑については、トレンチ調査ではあるが、遺構相互に重複関係が認められず一定の距離を有すること、住居跡はすべて火災住居であること、覆土の多くには細かい白色粒子(火山灰か)を含む間層が1層レンズ状に堆積しており、その他の層についても近似していること<sup>(註)</sup>などから、西側に比高差1~1.5mの沖積地が広がる沖積性の低位段丘上の縁辺部に立地する東西約60m、南北約90mの一つの完結した単位集落と考えた。

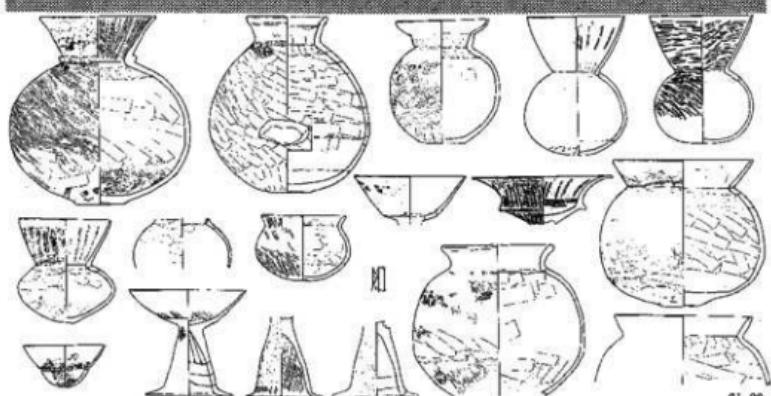
出土土器については、壺・小形丸底壺・器台・高杯・楕・有孔鉢・甕などがあり、そのほと



第2図 花の木町遺跡出土土器(1)



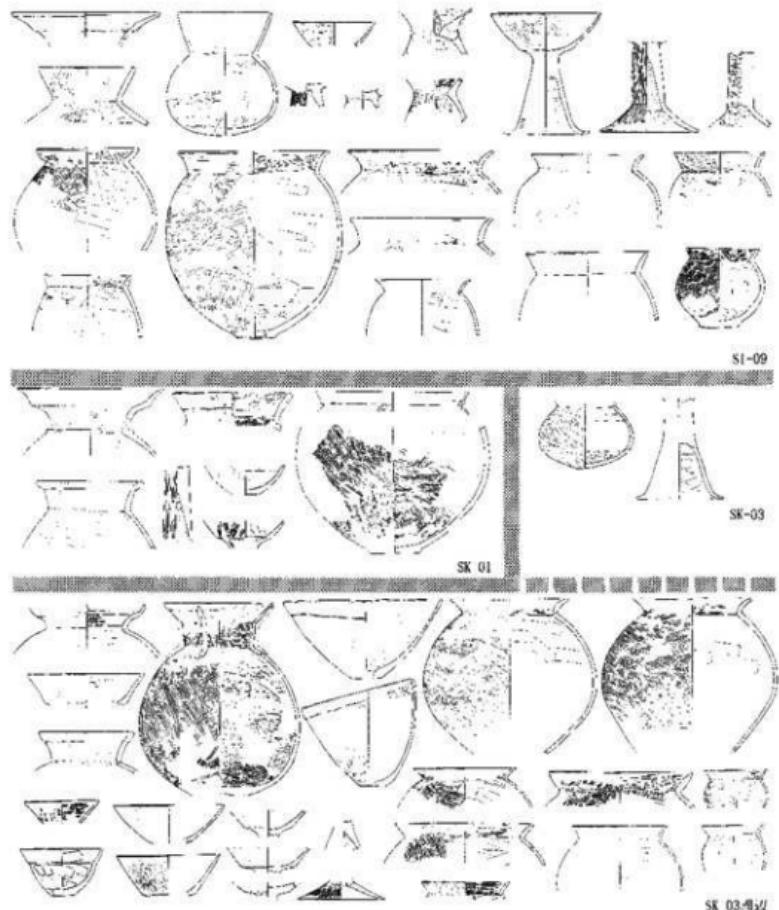
SI-07



SI-08

第3図 花の木町遺跡出土土器(2)

などが白色粒子を含む間層より下からの出土である。全ての器種が揃っている住居跡はSI-07のみであるが(第2~4図)、器種の欠落している住居跡についても各住居跡ごとの器種組成を分析していくと、住居間に補完関係が成立し、ほぼ同一時期のものと考えた。また、高杯など同一器種でも異なる類型の上器が同一住居内の床面直上や同一層中から出土している例がいくつかみられるが、それまでの編年の大元親にとらわれず、出土状況から同一時期(施設時における



第4図 花の木町遺跡出土上器(3)

ける)の遺物として捉えた。<sup>(註3)</sup>

そして各器種について、県内、近県の類例と共に件関係の比較検討をおこない、<sup>(註4)</sup>

1. 壺はいずれも前期の範疇で捉えられるが、後出的傾向が窺えるものが少なくなく、複合口縁壺、直口壺が多いことが注目される。
2. 小形丸底壺は体部のヘラナデ、ヘラケズリが目立ち、ヘラミガキが粗雑なものや体部が球形に近いものなど後出的傾向が窺える。
3. 器台は出土点数が少なく粗製品が目立つ。唯一の精製品についても、くびれ部にしまりがなく退化的である。
4. 高杯は東北地方埴輪期の編年で最終段階に位置付けられる中実柱状脚のものと、次期に盛行する粘土組巻き上げによりラッパ状に開く柱状脚の高杯が共存する。
5. 壺はS字壺、單口縁付壺を若干含むが、單口縁で「く」の字に外反する半底の壺が主体で、胴部上半にハケメが残り、下半をヘラ整形するもの、全面ヘラ整形のものが多く、次期様相の壺が出現する。

などの特徴を指摘した。そして、古墳時代前期の器種をすべて有しているものの、各器種に後出的傾向がみとめられ、高杯・壺については次期様相が窺えることから、前期と中期の過渡的段階と考え、前期の最終段階に位置付けた。この位置付けに関しては、今も大きな変更は考えていらない。

#### 4. 花の木町段階の設定と県内の関連遺跡

前章で花の木町遺跡の発掘調査の所見、器種組成の分析などから住居間の補完関係が成立する可能性について述べた。ここではまず、本県の前期最終段階として花の木町遺跡出土の十器群を基準に花の木町段階を設定し、県内のこの段階とその前後の遺跡の上器についてみていく。なお、出土した土器の全てを型式分類し説明することは、かえって煩雑となるため、主張的な型式、セット組成において必要な型式のみ説明していく(第15図参照)。

##### <花の木町段階>

壺 二重口縁壺、複合口縁壺、直口壺(所謂大形壺)がある。二重口縁壺は口縁部が頸部から外傾してたちあがり、二重口縁との段が内外面とも明瞭なものの(A)と内面の段が明瞭でなく、外面を突出させて段を強調するものの(B)がある。

複合口縁壺は頸部のしまりが全体的に弱く、口縁は直立ぎみに外反してたちあがり複合口縁部で強く外反するものが多く、胴部は球形に近く整形がハケメとヘラミガキのもの(A)と胴部が長軸化し整形がヘラナデ・ナデによるもの(B)がある。

直口壺は球形の胴部から胴高とほぼ等しい口縁部が直線的ないしは内湾ぎみに開き底部が丸

底ないしは凹底のもの(A)と胸部が偏平球を呈し、底部がヘラケズリによりつくりだされているもの(B)がある。なお、A類は頸部のしまりが強いもの(A1)と頸部のしまりが弱いもの(A2)がある。このほか、単口縁の並が組成に加わる。

**小形丸底壇** 体部最大径が頸部ないしは体部上半にあり半球形を呈するもので、口径が器高および体部最大径を上まわるもの(A)と頸部がしまり体部最大径をほぼ中位にもも球形を呈するもの(B)がある。全体的にA類に比べB類の整形は粗雑である。

**器台** 器受部は浅くやや内凹ぎみに開き、しまりの弱い折れ部から脚部がスカート状に緩やかに広がるもの(A)と器受部径と脚部径がほぼ同じで「X」字状を呈するもの(B)。台付窓の台部を思わせるもの(C)がある。B、C類は厚手で整形が粗雑である。なお、この段階のセットにおける器台の占める割合は低い。

**高杯** 脚部に注目すると、大きくは株状脚(A)とラッパ状に開く脚(B)の二つに分類できるが、細部において更に二分する。A類は脚部が中尖柱状で、基部が破有し円錐状に開くもの(A1)と中尖柱状の脚部をくり抜いたもの(A2)で、後者は脚部上部より下部が若干太くなり基部は破有し円錐状に開くものが多い。またB類についても、脚部上半は中尖柱状で、下半は粘土紐巻き上げによりラッパ状に開くもの(B1)と脚部がラッパ状に開き、内面に粘土紐巻き上げ痕を残すもの(B2)がある。基部は前者が縫をもたずに軽く開き、後者は縫をもって短く開く。なお脚部は不明であるが、环部下端に突出した縫を有し、口縁部が大きく外反するもの(C)がある。概 体部が偏平な半球形を呈するもので、口縁部は短く外反する。内面の縫は強いが外面は弱い。この段階の組成率は低い。

**有孔鉢** 復合口縁の鉢形を呈するもので単孔のものである。組成率は低い。

**甕** 「く」の字に開く単口縁平底の甕がほとんどで、脚部全面がハケ整形のもの、脚部上半ハケ整形で下半ヘラ整形のもの、脚部全面ヘラ整形のものがある。全体的には後者の占める割合が高い。このほか、S字型、ハケメの消失した岸口縁台付甕も存在するが、組成率は低い。

以上が、花の木町段階の各器種の概要であるが、つぎに県内の該期の遺跡と土器についてみたい(第5図)。なお、ここでは最も敏感に形態変化をする高杯と小形丸底壇の共作に注目し、東海系の高杯消滅後の柱状脚の高杯の出現段階を十にあつかう。

#### (1) 大森遺跡(那須郡小川町二輪)

那珂川の支流、榎津川の右岸段丘上に立地する。県教委が発掘調査した仲町遺跡、町教委が発掘調査した二輪仲町遺跡とは同一集落と考えられ、前者からは古墳時代前期の土師器数点、後者からは万形周溝墓が1基発見されている。昭和57年、小川中学校社会部の実習を兼ねて発掘調査が実施され、該期の住居跡1軒が、平安時代の住居跡と入れ子の状態で発見された。遺物は北東コーナーの貯蔵穴から甕・小形丸底壇・高杯・甕が織まって出土している。高杯と小

形丸底<sup>(注5)</sup>堵はほぼ完形で、それぞれ底部に稜を有さないA1類とA類の範疇でとらえられるものである(青木 1986)。

(2) 神田城南遺跡(那須郡小川町三輪)

大森遺跡の南700mに位置し、同じ段丘上に立地する。昭和42年、開田工事に先立ち発掘調査が実施され、古墳時代の堅穴住居跡5軒を検出した。未発表資料であるが、花の木町遺跡報告書作成時に岩崎卓也先生からご教示を得た。該期の住居は3号住居跡1軒のみで、坏部は欠損し不明であるが、細い中尖柱状部から稜をもたず円錐状に裾部が開き円孔を有する高杯と、小形丸底堵A類4点、下端に稜をもつ高杯坏部、椀、複合口縁の有孔鉢などが出土している(小川町 1991)。

(3) 石闘遺跡(矢板市石闘字彦左エ門山)

荒川の支流によって開析された台地の先端部に立地し、绳文時代の住居跡2軒、古墳時代前期の方形周溝墓1基、同中期の住居跡4軒、同後期の住居跡2軒が発見されている。該期の方形周溝墓は、高さ1.8mのマウンドを有し、周溝を含めた規模は南北17.8m、東西20.5mである。周溝からは破片のみであるが、周溝南側外縁の中央部から総数47個の壺・甕・高杯・有孔鉢・小形丸底堵などが密集して出土しており、周溝墓に伴う供獻用土器と捉えられている。高杯は坏部を欠損するA1類とC類の坏部や小形丸底堵を思わせる坏部が付くA2類が出土している。小形丸底堵はA、B両類が出土している。このほか、二重口縁壺・複合口縁壺・直口壺や有孔鉢、平口縁の甕などが共伴している(鈴木 1979)。

(4) 砂部遺跡(塙谷郡高根沢町大字太田字砂部)

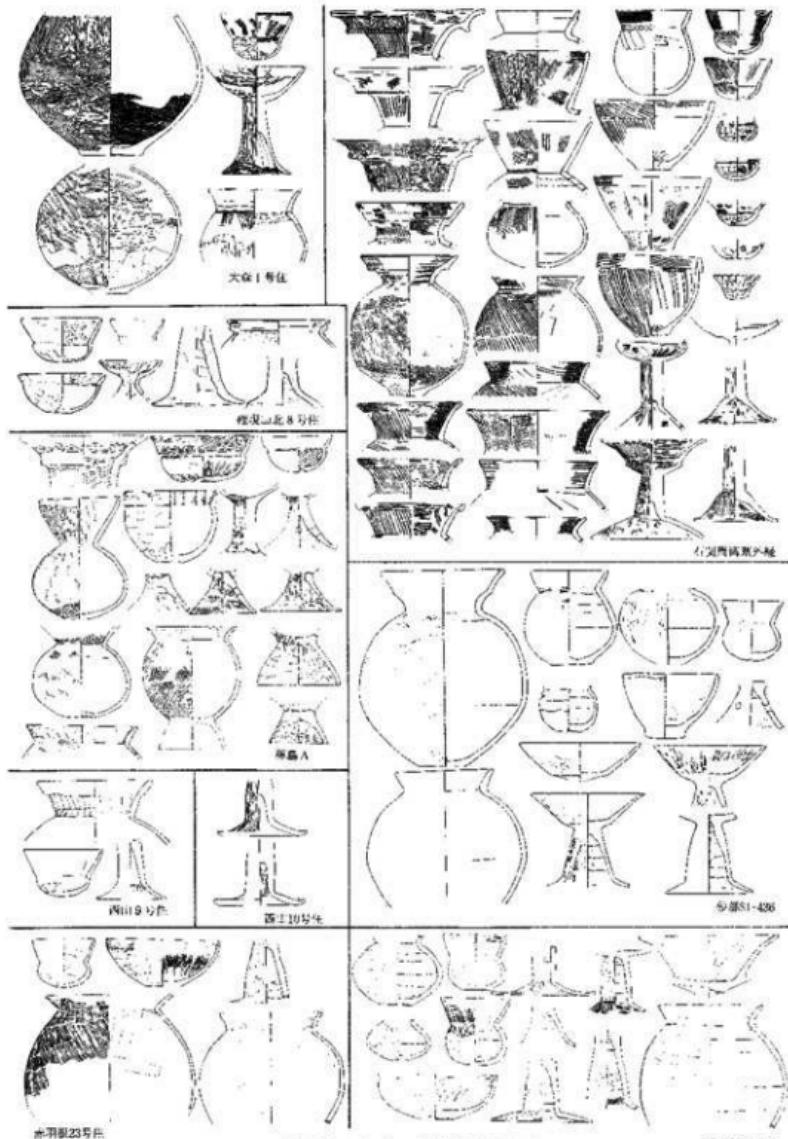
五行川低地の微高地上に立地し、中期を中心とした古墳時代の堅穴住居跡52軒、平安時代の堅穴住居跡78軒、掘立柱建物跡51棟が発見されている。高杯B2類と小形丸底堵B類の共伴資料として、SI-255、285、436、439などがある。二重口縁壺B類・複合口縁壺・口縁の短い直口壺・有孔鉢・平口縁平底甕等が共伴する(藤田 1990)。

(5) 権現山北遺跡(宇都宮市茂原町字花次)

宇都宮市域の南端、田川の西岸を南北にのびる台地の東縁部に立地する。1977年、開田工事に先立って発掘調査が実施され、古墳時代の住居跡18軒が発見された。該期の住居跡は8号住居跡で高杯B2類と小形丸底堵B類・器台A類・椀・S字甕が出土している(久保 1979)。

(6) 程島A遺跡(芳賀郡二宮町程島)

鬼怒川と五行川に挟まれた宝積寺台地が南北に走る緩斜面にあり、台地の末端部に位置する。図示した土器は畑地耕作時に出土したものであるが、発見者の話から一括遺物として紹介されている。この中に、高杯A1類と口縁が短い小形丸底堵A類がある。他に、頭部が筒状で口縁部内面に緩やかな段をもつ二重口縁壺・直口壺・複合口縁甕・短く円錐状に開く高杯脚部・単口



第5図 県内の該期関連土器群

縁の壺・台付壺が紹介されている(井上 1974)。

(7) 西山遺跡（小山市大字中久喜字西山）

江川とその支流の小河川によって開拓された南北に長い台地の縁辺に立地し、弥生時代後期1軒、古墳時代前期6軒、中期8軒、奈良時代4軒の住居跡が発見されている。該期のものは高杯で見る限り、9号と10号住居址の2軒である。9号住居址では壺部を欠くが高杯A1類と小形丸底壺A類、複合口縁壺が出土している。また、10号住居址からはやはり壺部を欠くが壺端部が反り返る高杯A1類が2点出土している(秋山 1988)。

(8) 赤羽根遺跡（下都賀郡岩舟町静和）

波良瀬川左岸の洪積台地上に立地し、古墳時代前期中葉から後期初頭の住居跡117軒が発見されている。前期の住居跡からは高杯と小形丸底壺の良好なセット関係を示す資料はないが、高杯B2類と小形壺B類の共伴するものは23・33・34・38号住居跡をはじめ、良好な資料が多い。また、高杯B2類でも脚部が棒状となるものが少なくなく、壺部の広がりが大きいことが注目される(岩淵 1984)。

以上、高杯と小形丸底壺の共伴する該期の8遺跡に説明してきたが、他にも多くの遺跡・遺構が存在すると思われる。しかし、この段階における県内の高杯の出土が意外に少なく、その他の器種についても補完関係を説明するには不十分なものが多く、細かな段階比定を困難にしているのが現状である。

## 5. 近県における該期土器の様相

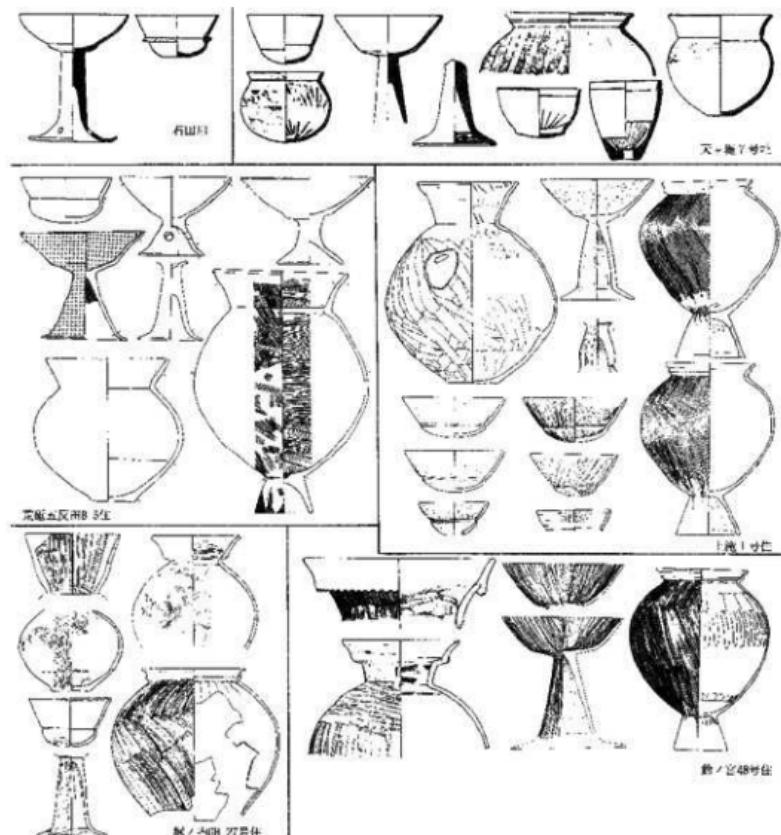
前章で、県内の前期後半から中期初頭段階と考えられる遺跡の高杯と小形丸底壺の共伴関係の明らかな事例についてみてきたが、本県のみではこの共伴関係を確固たるものにするには資料に乏しい。そこで、該期の近県の土器様相について高杯を中心概観し、補強したい。

### 関東地方北西部（第6・7図）

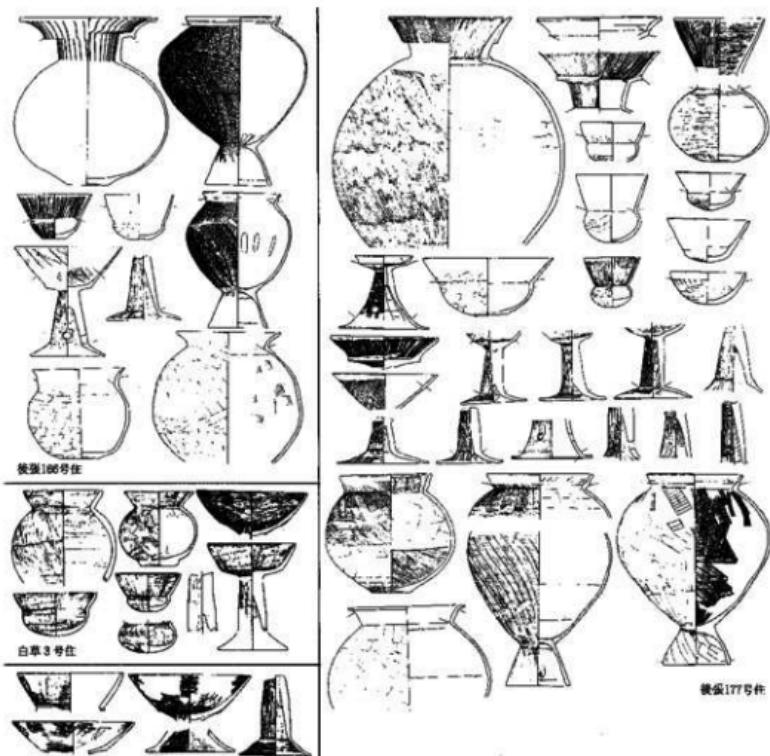
群馬県及び埼玉県北西部をさす。該期の遺跡として群馬県では石田川遺跡(松島 1968)、荒砥五反田遺跡B-5住(井上 1978)、天ヶ堤遺跡7号住、上滝遺跡1号住(佐藤 1981)、鉢ノ宮遺跡48号住(田口 1978)、堀之内遺跡27号住(荒巻 1982)、埼玉県では後張遺跡166、177号住(立石 1983)や白草遺跡3、15号住(磯崎 1992)などがある。石田川、荒砥五反田、天ヶ堤遺跡の高杯は脚部上半が中尖柱状で荒砥五反田では、前段階の影響の残る高杯と共に伴している。上滝、鉢ノ宮、堀之内、後張166住、白草15号住の高杯は花の木町遺跡に較べると脚部がやや細めのB2類で白草15号住以外では壺はS字壺が主体である。また、後張遺跡177号住では微妙な形態差はあるが高杯A、B、C類が存在し、小形丸底壺A、B類、やや長脚の器台A類、S字壺等と共に伴している。

関東地方南部（第8・9図）

神奈川県、東京都、埼玉県南東部、千葉県西部をさす。神奈川県では内原遺跡E-16、18号住等(西川 1982)、東京都では世田谷区総合運動場遺跡10、11、16号住(桜井 1974)、埼玉県では中里前原11号住(桶川 1981)、大山遺跡12、18号住等(今泉 1979)、下加南遺跡4、7号住(大宮山役所 1968)、千葉県では千代田遺跡28号住(四街道町 1972)、上宇遺跡43、66号住(村山 1979)などがあげられる。内原E-18号住の高杯は広義にはA2類に属するが円孔を有し脚中位から縁をもたずに円錐状に擴がる点で異なる。擴部が大きく広がるやや吉相の高杯と共に作る。この地域の主体となる高杯は内原16号住、世田谷区総合運動10、16号住、中里前原、大



第6図 関東地方西部(1)



第7図 関東地方西部(2)

山、下加南、土字43号住等のA2類である。また、世田谷区総合運動場遺跡11号住、千代田遺跡で高杯B2類と小形丸底壺A類が、土字43号住では高杯A2類とB2類、「X」字状器台が共存している。

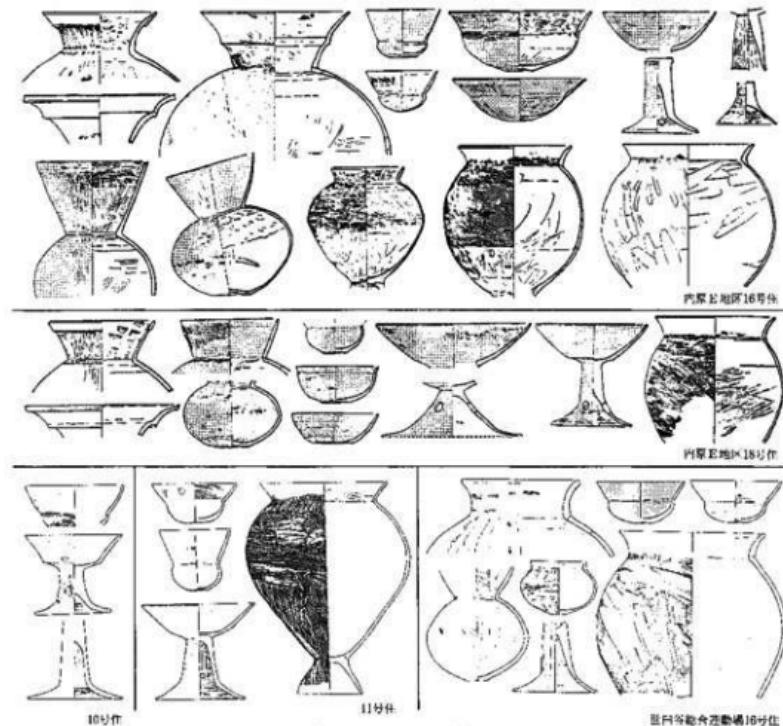
#### 関東地方東部（第10・11図）

千葉県東部及び茨城県をさす。千葉県では我孫子中学校校庭遺跡1号住等（田村 1969）、江原台遺跡126号住（川村 1979）、公津原Loc39遺跡005号住、Loc40遺跡019B号住等（天野 1981）、茨城県では佐自塚古墳（齊藤 1979）、木滝台遺跡044-c区、桜山古墳A地点1号住（田口 1978）、沖餅遺跡7、8号住（渡辺 1980）、武山遺跡26号住（白石 1992）東中根遺跡H1、2号住（鈴木 1982）、山崎遺跡2、4号住等（井上 1990）があげられる。この地域では高杯A1類は公津原、桜山古墳A地点1号住、山崎遺跡で出土しているが、那珂川の北に位置する山崎遺跡で纏まつ

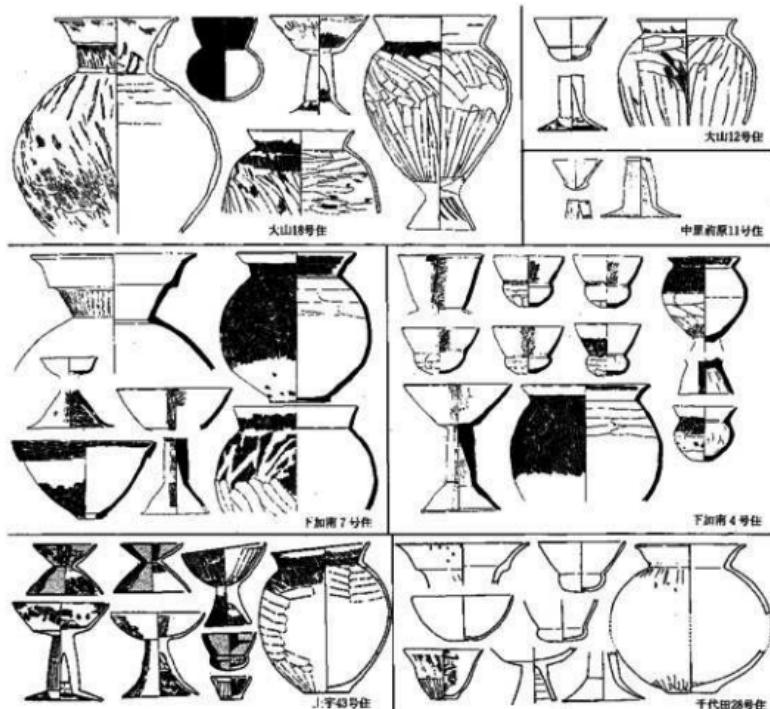
て出土している以外はいずれも単点である。A2類は我孫子中学校校庭、公津原、沖餅、山崎遺跡等で出土しているが、脚下部が上位に較べたいものが多く、B2類に近似するものも存在する。高杯B2類は江原台、佐白塚古墳、桜山古墳1号作、武川、東中根、山崎遺跡等で出土している。これら3類の高杯を出土するのは山崎遺跡のみであるが、A1類とB2類の共作は桜山古墳A地点1号作、東中根遺跡II号作でみられる。また、木瀬台遺跡044-C区では内原E-18号作に類似した高杯が出土しているが、東海系の高杯と共伴している。

#### 東北地方南部(第12・13図)

福島県及び宮城県、山形県の南部の地域をさす。福島県では権渡台畠遺跡(吉川 1990)、宮田A遺跡1号周溝(柳沼 1985)、内宿遺跡(桜村 1982)、龍門寺遺跡7号竪穴等(廣岡 1985)、朝日長者遺跡78、102号作(いわき市 1981)、中山遺跡(石本 安田 1991)、宮城県では今熊野遺跡15号作(丹羽 1985)、山前遺跡大溝(小牛田町 1976)、留路遺跡(手塚 1981)、西野山遺跡(丹羽 1



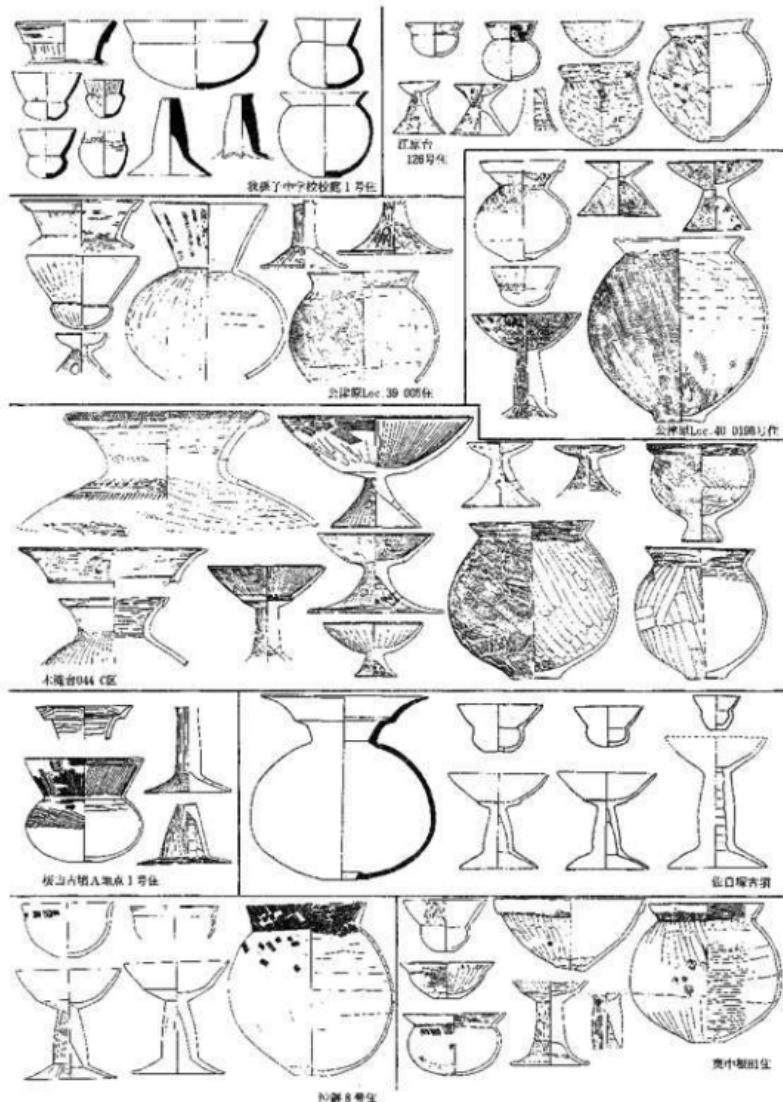
第8図 関東地方南部(1)



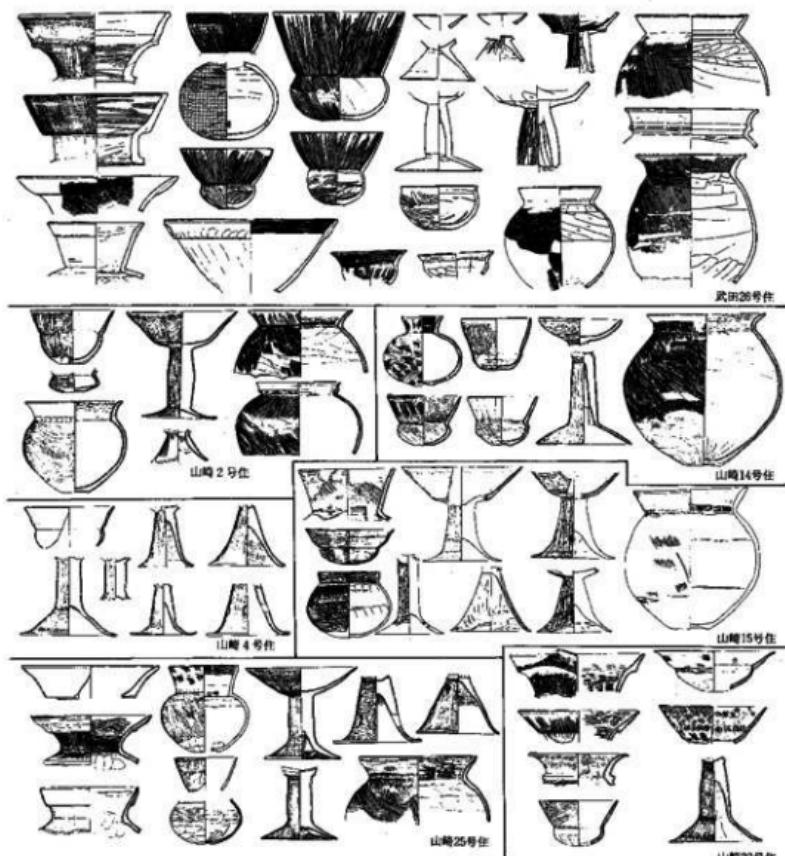
第9図 関東地方南部(2)

974)、清水遺跡(丹羽 1981)、山形県では下槻遺跡6号住(長橋 1981)等があげられる。この時期、主体となる高杯はA類で、特にA1類が日につく。器台の組成率は関東地方に較べると高いようで、会津地方では高杯A類と同様の器台が多く存在する。また甕は「く」の字口縁の平底のものが主体であるが、会津地方では北陸地方の特色をもつ甕が組成に加わる。B類については、B1類が宮城県越山遺跡(志間 1976)、清水遺跡、福島県南原遺跡(小窪 1971)で発見されているが共伴関係は明らかでない。B2類は龍門寺、西野田遺跡で脚部破片が認められる程度である。また、今熊野遺跡15号住、清水遺跡包含層N層、宮田A遺跡等の据部が稜をもたずに広がるものは丹羽氏の言われるよう、A1類より一段階古い可能性が高いが、据部の広がりが小さいものは中山1号甕のようにA1類と共伴しているものもある。

以上、隣県各地域の古墳時代前期後半段階の上器様相について高杯を中心に概観してみたが、高杯の各分類にしたがい分布と共伴関係について若干の補足をおこなう。



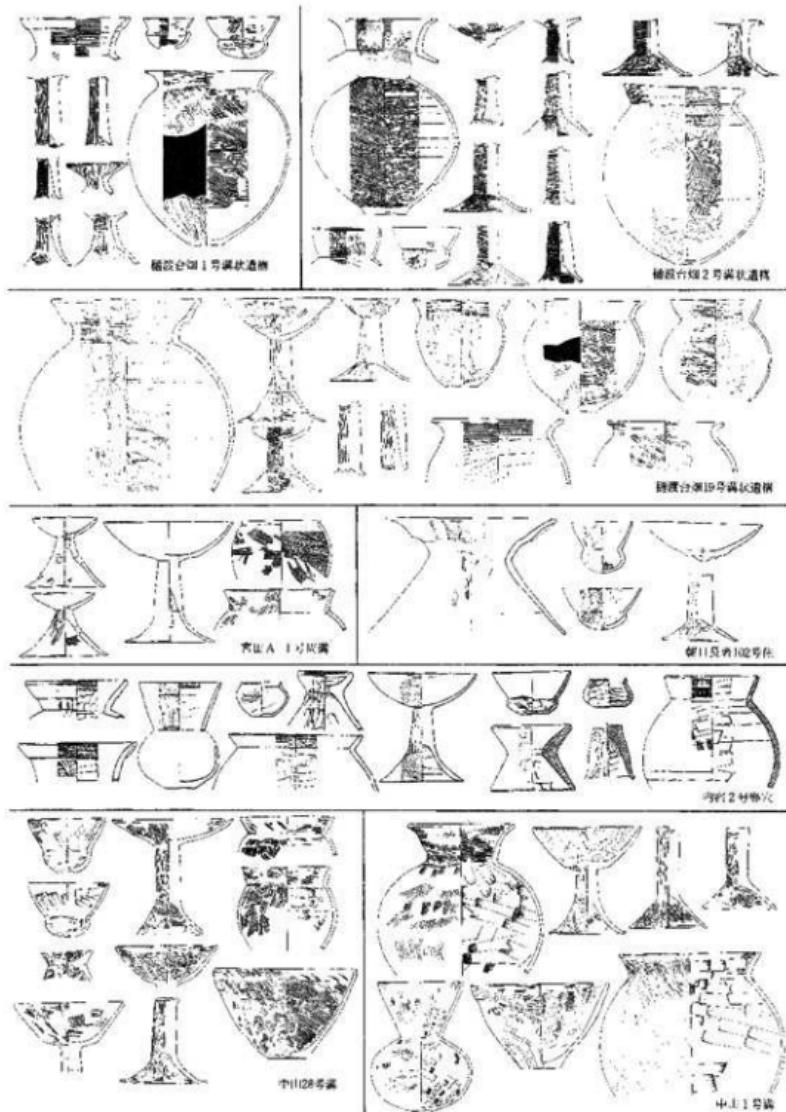
第10図 関東地方東部(1)



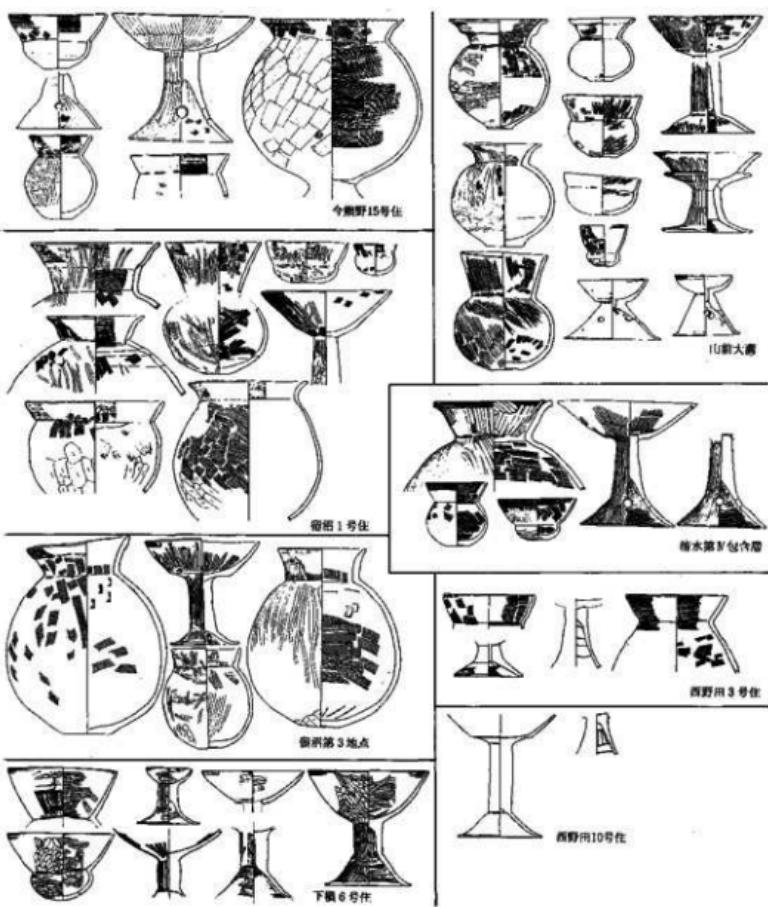
第11図 関東地方東部(2)

まず、高杯A1類を主体とする遺跡は山形県下柳遺跡・宮城県留沼遺跡・西野田遺跡・福島県  
穂波台畑遺跡・中山遺跡・内宿遺跡・朝日長者遺跡・茨城県山崎遺跡など、東北地方南部から  
関東地方北東部に分布の中心をもつ。この地方以南では埼玉県後張遺跡、千葉県公津原Loc3  
9遺跡等で散見できる程度で客体的な存在である。

高杯A2類については、東北地方南部から関東地方北東部・南部に分布し、福島県穂波台畑遺  
跡・龍門寺・茨城県山崎遺跡ではやや盛まって出土している。A1類に較べ分布が若干南に寄る  
が、関東南半のものは脚部の太いB2類の形態に近いものもみられる。



第12図 東北地方南部(1)



第13図 東北地方南部(2)

高杯B1類は高杯A1類とB2類の折衷形態と考えられるものであるが、管見では宮城県越田遺跡、田町裏遺跡(志間 1976)、清水遺跡、福島県南原遺跡ぐらいしか知らない。丹羽氏によると清水遺跡のものは塩釜式の第Ⅲ段階に位置付けられている(丹羽 1985)。

高杯B2類については、まず小形丸底壺A類との共作についてみてみると、群馬県上流遺跡1号住、堀ノ内遺跡27号住でS字彫と東京都世田谷区立総合運動場遺跡11号住で単口級台付彫と、千葉県土字遺跡66号住、千代田遺跡28号住、江原台遺跡128号住で単口級彫や器台と、埼玉県後

張道跡177、179、180号住で複合口縁、二重口縁壺、S字型や單口縁壺、直口壺、器台等と茨城県佐古塚古墳では二重口縁壺と高杯B2類に類似した器台等と出土しており、関東地方では前期最終段階に確実にこの形態の高杯が出現している。さらに西に口を向けると、長野県石川条甲遺跡(青木 1992)、愛知県西北山遺跡窓B(浅野 1971) 等でこの共伴が認められる。しかし、東北地方においては、福島県龍門寺遺跡7号住、宮城県西野山遺跡3号住でこの共伴が認められるが、いずれも高杯は脚部破片であり、良好な資料に乏しい。

一方、高杯D2類と小形丸底壺B類の共伴については、一段階新しい中期になって関東地方では普遍的に認められるようになり、セットにおけるこれらの器種の割合も高くなる。東北地方についても、福島県龍門寺遺跡5号住、人根塚22号住(柳沼 1989)、宮城県清水遺跡10号窓等に認められるが、高杯脚部の広がりは関東地方のものに比べ大きい。

高杯C類は、本県では小川町谷田遺跡(大金 1968)、宇都宮市櫛現山北遺跡、岩舟町赤羽根遺跡など中期になって盛行するようであるが、花の木町遺跡ほど杯部下端が突出しないものは久慈市石関遺跡および埼玉県後張遺跡177号住、茨城県武川遺跡25号住(白石 1992) 等で出土している。

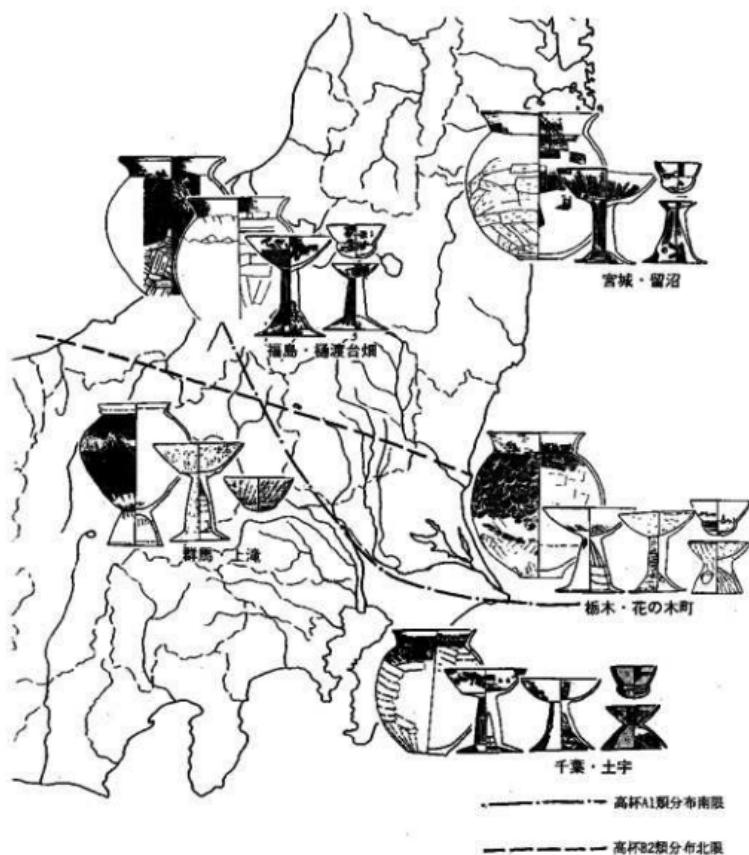
つぎに、高杯の各類型の共伴についてふれておく。高杯A1類とA2類の共伴については福島県極渡台窓遺跡、中山遺跡、茨城県山崎遺跡など東北南部～北関東東部で比較的多くみられる。高杯A1類とB2類の共伴については茨城県桜山古墳A地点1号住、山崎遺跡4号住、埼玉県後張遺跡177号住などでみられる程度であるが、両類型の高杯の分布域の重なる北関東北東部での共伴の増加が待たれる。

以上、花の木町遺跡出土の高杯の分類に従い、近県の高杯について地域性を中心にかいつまんで述べてきたが、各地域の様相が若干変質しながらもこれらの高杯が花の木町遺跡で共伴しても不思議ではないことが明らかとなった。この他の器種についても、器台、甕等に地域差が認められるが、第14図に人雜把ではあるが地域性を示し、ここでは省略する。

## 6. 栃木県の該期土器様相

前章で前期最終段階の近県の上器様相についてみてきたが、これらを考慮しながら本県のこの段階の土器をみていきたい。

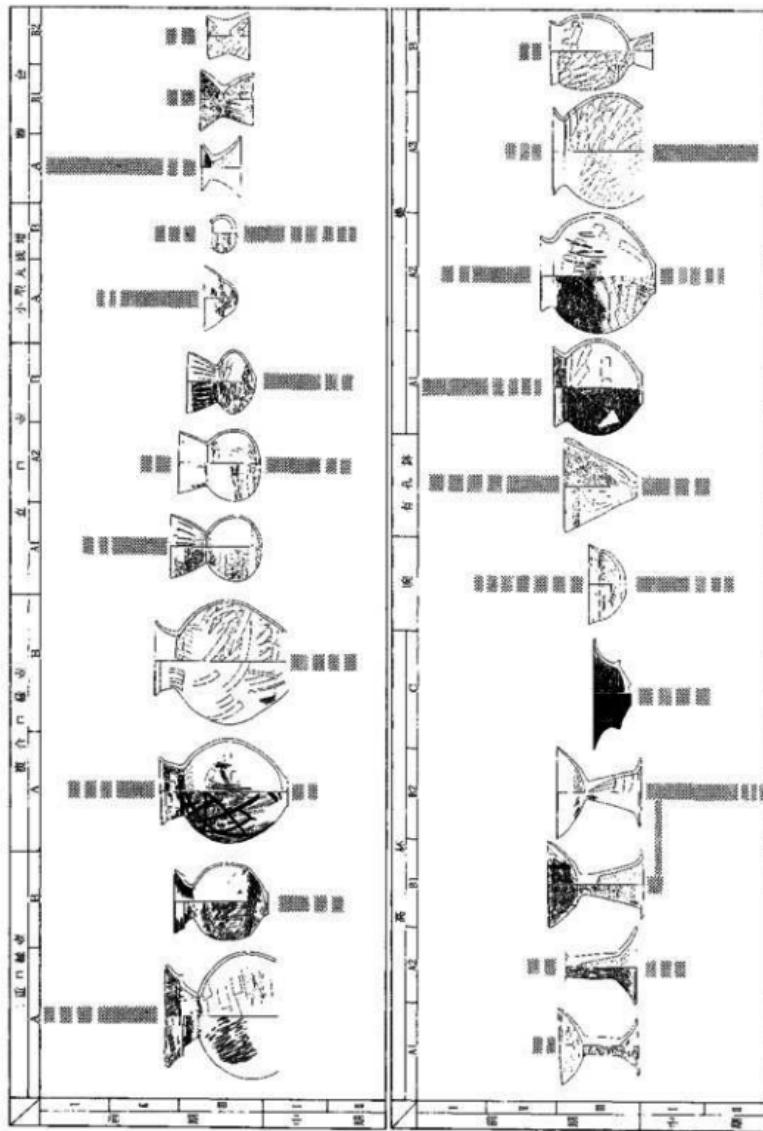
まず、花の木町遺跡の上器群を前期最終段階に位置付ける。最も共伴関係に疑問のもたれた高杯A、B類の共伴については、本県ではまだ確認されていないが、隣県では数例確認されており、また高杯B類がこの段階に出現していたことは、関東地方北西部の共伴事例等で明らかとなった。この段階の県内の遺跡としては、高杯A1類を主体とする石関遺跡方形周溝墓前庭部の上器群、西山遺跡9、10号住があげられよう。程島A遺跡についても発掘調査資料ではない



第14図 関東・東北地方南部における古墳時代前期最終段階の土器の地域差  
が、ほぼこの段階で大過ないと考える。一方、高杯B2類を出土するこの段階の遺跡としては權  
現山北遺跡8号住が考えられる。

次に、花の木町段階の前段階については、高杯でみると、近県の事例でみると限り、内原遺跡、木滝台遺跡、宮田A遺跡、今熊野遺跡等で出土しているような柱実柱状の脚部から稜を持たず  
に裾部が広がる神山城南遺跡3号住が相当するものと考えられる。大森遺跡1号住については、  
裾部が稜を持たずに寛き、花の木町遺跡の高杯にこの類例が無いことから花の木町段階より若  
干古い段階とも考えられるが、裾部の開きが小さく、中山遺跡でA1類の高杯と共に伴しており、

第15回 花の木判段階の器皿の消長



花の木町段階まで残る可能性も十分考えられる。このほか、高杯の資料が良好ではないが、他の器種について比較検討していくと市貝町久保遺跡（田代 1992）や岩舟町赤羽根遺跡にこの段階の遺構が存在するものと考える。

花の木町段階の次の段階については、高杯A1、A2類、小形丸底壺A類が消滅し、高杯B類と小形丸底壺B類が共存する段階で、砂部遺跡SI-255、436や赤羽根遺跡のⅢ期がこの段階に相当するものと考える。この段階の高杯B類はセットにおける高杯の割合が高くなると同時に、脚部や瓶部にバラエティーが認められるようになる。

なお、花の木町段階を中心に器種の消長を示すと、ほぼ第15図のようになる。

## 7. おわりに

これまでに、花の木町段階の設定を軸に、この前後の時期の上器様相について高杯と小形丸底壺の共存から近畿の土器様相を採用しながら本県についてみてきた。また、花の木町遺跡では高杯A1類とB1、B2類との共存がSI-07、09でみられるが、近畿では中実柱状のA1類は東北地方南部に分布の中心をもち関東地方では客体的な分布を示す。一方、高杯B2類と小型丸底壺A類の共存は東北地方では不明であるが、関東地方ではそれほど珍しいことではない。花の木町遺跡でみられる高杯A類とB類の共存は、本遺跡のほか埼玉・茨城の両県で散見できるのみであるが、北関東という地域であればこその共存であり、この事実が関東地方と東北地方の両地域の編年の並行関係を考えるうえで、重要な鍵を握っていることは明らかである。

花の木町遺跡出土の土器をみていくと、高杯はいずれも近畿地方にその系譜が求められるものであり、本県でそれまで影響の強かった東海系のものはS字彫と帯の一部にその残影がみられる程度である。<sup>(44)</sup> この段階は本県ではまだ資料が充実しておらず、認識も不十分であるが、從来大きな西期があるとされていた和泉期の一段階前に東海系土器の払拭、畿内系土器への転換が行われていたものと考えられる。この時期、集落については東北地方南部で遺跡の増加がみられる程度で大きな変化はみられないが、この時代の象徴ともいえる古墳においては、岩崎卓也が「四世紀末にはじまる東日本における土器の変化はそれまでの東海地方からの勢力を介しての間接的接触から、直接的なそれへの転換を意味するかとも思える。もしそうであるなら埋葬施設にみる中火への合一化も、東北地方への古墳分布の拡大もまた、相互に関連しあう、ひと続きの出来事だった公算が大きくなる。…………王權中枢とはひと味異なる個性をとどめた東日本の諸地域も、一部を除いて四世紀末には、王權中枢の直接的な影響下に組みこまれたとも読みとれるのである。割竹形木棺と粘土櫛の波及、そして東北地方への古墳分布の拡大は、まさしくこの段階における現象であった。」と指摘するように大きな西期が認められるのである（岩崎 1989）。

小稿は、本県であまり明確ではなかった古墳時代前期最終段階の土器様相について花の木町遺跡の資料を中心に指摘してみた。高杯A、B類の共伴に関しては、まだ資料が不足しており問題も残るが、多くの方々の御叱正、御批判をいただければ幸いである。

最後に、鍋木理広、小森紀男、今平利幸、真保昌弘、田代隆、藤田典夫、橋本澄朗をはじめ多くの方々に御助言・御指導を賜った。記して謝意を表したい。

(1993年3月12日稿了)

(註)

1. メルクマールとなる器種が段階ごとに異なって、その他の器種について説明が省かれていると、その器種を欠落した一括資料は段階比定が困難になる場合が少なくない。各器種について、型式変化・消長をある程度示しておく必要がある。
2. 遺跡の立地等からも、上屋を失った遺構の埋没は長期にわたったとは考えられず、各住居跡には継続期間の差はあるものの、廃絶時期に関しては大きな時期差は無かったものと考える。
3. これまでの編年観からすると、SI-08は高杯に付随して他の住居跡出土の土器群より新相とも考えられようが、補完関係等から同一時期と考えてさしつかないと考えた。
4. 報告書では紙敷等の関係から他遺跡の比較資料を図示できず、大変理解しにくい分析になってしまったことも本稿をおこす理由のひとつであった。
5. 昨年、小川町教育委員会で発掘調査した上宿遺跡の住居跡から、火森遺跡1号住と同様の高杯が粗製の器台、単口縁でナデ整形の台付甕や平底甕と出土している。真保昌弘氏の御好意により大森遺跡・神田城南遺跡とともに実見させていただいた。
6. 高杯A1類については市貝町久保遺跡SI-115(歴史時代住居)からも出土しているが、高杯と小形丸底甕の共伴を示す良好な資料に乏しい。しかし、前期の24軒の住居の大半は後半段階のものであろう。また、高杯B2類と小形丸底甕B類が共伴する住居は他にもあるが、共伴関係の不明なもの、より新相を示すものはここでは省いた。
7. 表採資料ではあるが、宮城県越田遺跡で高杯A1類とB1類の共伴が指摘されている。東北地方南部ではこの時期の発掘調査が増加しているものの、この共伴はまだ不明な点が多い。
8. 高杯B2類に関しては、東海道・東山道からの波及ルートが考えられるが、高杯A類に関しては、前段階の高杯からの型式変化や北陸地方との関連なども含めて考えていかなければならない。

## 参考文献

- 青木一男 1992 「上器に垣間見る科野の古墳出現期」『古墳出現期の文化』 上山市立信濃国分寺資料館
- 青木健二 1986 『栃木県小川町大森遺跡・谷田1号古墳』 日本歴史研究所
- 秋山隆雄 1988 『西山遺跡発掘調査報告書』 小山市教育委員会
- 浅野清春 安達厚三 1971 「西北出遺跡出土の土師器」『いのちみや考古』No.18
- 阿部 茂 後藤信祐 1987 『花の木町遺跡』 栃木県教育委員会
- 天野 努 1981 『公津原』Ⅰ 千葉県教育委員会
- 荒巻 実 1982 『堀ノ内遺跡群』 藤岡町教育委員会
- 石本 弘 安田 稔 1991 「中山遺跡」『栃木開発関連遺跡調査報告』Ⅱ 福島県教育委員会
- 磯崎 一 1992 『白草遺跡』Ⅱ 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上唯雄 1978 『荒砥五反田遺跡』 群馬県教育委員会
- 井上義安 1990 『那珂湊市部田野山崎遺跡』 山崎遺跡群発掘調査会
- 今泉泰之 1979 『大山』 埼玉県教育委員会
- 岩崎卓也 1989 「古墳分布の拡大」『古代を考える 古墳』
- いわき市教育委員会 1981 『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』
- 岩淵一夫 1984 『赤羽根』 栃木県教育委員会
- 大金宣亮 1968 「那須郡小川町谷田遺跡出土の上部式土器」『栃木県考古学会誌』第2・3集  
合併号 栃木県考古学会
- 大金宣亮 1973 『井頭』 栃木県教育委員会
- 大宮市役所 1968 『大宮市史』第1巻 一資料編ー
- 岡村眞文 岩崎卓也 1985 『我孫子中学校校庭遺跡』 我孫子市教育委員会
- 小川町教育委員会 1991 『小川町の遺跡』
- 樋村友延 1982 『内宿遺跡』 財団法人 いわき市教育文化事業団
- 久保哲二 1979 『椎現山北遺跡』 宇都宮市教育委員会
- 小牛田町教育委員会 1976 『山前遺跡』
- 小瀧利洋 1978 『南原遺跡』 河原町教育委員会
- 小森紀男 1980 「栃木県における五鏡式土器の研究—谷近台遺跡の編年的位置を中心として—」『宇大史学』第2号
- 財団法人 栃木県文化振興事業団 財団法人 福島県文化センター 1990 『第12回 栃木・福島埋蔵文化財研究協議会資料一分科会 古墳出現期の様相ー』
- 齊藤 忠 1979 「佐白塚古墳」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代

- 桜井清彦 1974 「世田谷区立総合運動場遺跡調査報告書（第3・4次調査）」『世田谷区立郷土資料館紀要』第3集 世田谷区立郷土資料館
- 佐藤明人 1981 「上滝遺跡」『八幡原A・B 上滝 元島名A-関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書一』群馬県教育委員会
- 志垣泰治 1976 「古式土師器を出した丸森町越田遺跡」『東北考古学の諸問題』
- 白石真理 1992 『武山』V 財団法人 勝田市文化・スポーツ振興公社
- 鈴木正博 1982 「東中根遺跡」 勝田市史編さん委員会
- 鈴木 勝 1979 「石闕（彦左エ門川）遺跡」 栃木県教育委員会
- 高橋 和 1986 「東北地方南部における古墳時代前期尚杯に関する視点－中実柱状部をもつ脚部形態について－」『法政史論』第13号
- 田口一郎 1978 『鈴ノ宮遺跡』 高崎市教育委員会
- 田口 崇 1978 『木庭台遺跡・桜山古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』 鹿島考古学資料刊行会
- 田代 隆 1986 『鳥森遺跡』 財団法人 栃木県文化振興事業団
- 田代 隆 1992 『久保遺跡』 栃木県教育委員会
- 立石盛詠 1983 『後張』本文編II 財団法人 墓玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田村晃一 1969 「我孫子中学校校庭遺跡」「我孫子古墳群」 我孫子市教育委員会
- 田村言行 1979 「江原台」 佐倉市教育委員会
- 手塚 均 1981 「留沼遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書II』 宮城県教育委員会
- 長崎 至 1981 「下根遺跡発掘調査報告書」 山形県教育委員会
- 中村五郎 1992 「古式土師器・統繩文土器編年をめぐって」『北海道考古学』第28輯
- 西川修一 1982 「長井町内原遺跡」 内原遺跡調査団
- 丹羽 茂 1974 「西野田遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書I』 宮城県教育委員会
- 丹羽 茂 1981 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』 宮城県教育委員会
- 丹羽 茂 1985 「今熊野遺跡I-古代編-」「今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚遺跡」 宮城県教育委員会
- 橋本澄朗 1979 『薬師寺南遺跡』 栃木県教育委員会
- 橋本澄朗 1981 「古墳時代の土器」『栃木県史』通史編I 原始・古代一 栃木県史編纂委員会
- 橋本澄朗 1981 「栃木県」「古墳出現期の諸問題」（日本考古学協会昭和56年度大会）
- 橋本澄朗 梁木 誠 1984 「栃木県」「古墳時代土器の研究」 古墳時代土器研究会
- 橋本澄朗 1988 「栃木県」「シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題」 日本考古学

協会編 学生社

- 廣岡 敏 1985 『龍門寺遺跡』 いわき市教育委員会
- 福田敏一 1981 『中里前原遺跡－第2次発掘調査（B地点）－』 与野市教育委員会
- 藤田典夫 1984 『伯仲遺跡』 栃木県教育委員会
- 藤田典夫 1990 『砂部遺跡』 栃木県教育委員会
- 松島栄治 1968 『石田川－石田川遺跡調査報告－』 「石田川」刊行会
- 村山好文 1979 『土字』 日本文化財研究所
- 柳沼賢治 1985 「宮田A遺跡」 『郡山東部』 V 郡山市教育委員会
- 柳沼賢治 1989 『大根畠遺跡』 2 郡山市教育委員会
- 山ノ井清人 1974 「程島A遺跡出土の古式土師器」 『下野古代文化』 別冊号 下野古代文化研究会
- 山ノ井清人 1979 「古墳時代」 『宇都宮市史』 第1巻 原始・古代編 宇都宮市史編纂委員会
- 古田博行 1990 『若宮地区遺跡発掘調査報告書－桶渡台畠遺跡－』 会津坂下町教育委員会
- 四街道町千代田遺跡調査会 1972 『千代田遺跡』
- 渡辺俊夫 1980 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3－沖餅遺跡－』 財団法人茨城県教育財團

---

## 研究紀要 第1号

発 行 平成4年3月31日

編集・発行 財団法人 栃木県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

〒329-04  
栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙 474  
TEL 0285-44-8441  
FAX 0285-44-8445

印 刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷

---